

少女雑誌

今回、なぜこんなにも少女雑誌が話題になったのか疑問である。セックスの問題が、年々低年齢化の傾向にあり、初体験・妊娠・中絶・乱行に売春のお話は雑誌ジャーナリズムの世界ではごくごく日常の事であったはずなのに、現在、その話題となった少女雑誌のほとんどが休刊・廃刊となっているのも不思議なことである。「悪書」は国民の「良識」に敗れ去ったのであろうか。

一九八四年二月二十一日、衆議院予算委員会で、自民党の三塚博議員が数冊の少女雑誌を手に日本国に行く末を嘆いてみせた。——最近の少女雑誌のセックス記事は、かなり行き過ぎである。これは最近増加している少年犯罪と深い関係があると思われる。議員立法で有害図書の販売を規制すべきである——。立法化の前に雑誌がその姿を消した。この問題の本質が、語られることなく忘れ去られようとしている。いったい「少女雑誌」とは何だったのであらうか。問題になった少女雑誌とは、『GALS・LIFE』『ポップティーン』『Carrot・GALS』『Elleteen』『Kisses』などである。期待どおりのかなりキワドイ記事も掲載されている。「少女むけ体位学」「処女のためのシックスナイン講座」「名器の作り方」「童貞あてクイズ」「ラブホテルガイド」などなど。まさにHOW・TO・SEXと

いったところである。が、しかしそれはさして重要なことではない。

われわれは、性の問題を含めて学校や親たちが教えてくれないことを雑誌を通して学んで行く。よいことも、悪いこともすべて貪欲に吸収していく。また、それぞれの世代にバイブル的な雑誌が存在してきた。それは、けっしてお行儀の良い「教科書」などではなく、俗悪で、反社会的で、メチャクチャ面白いエネルギー源であった。彼女たちにとって、これらの雑誌はそういう感じのものかもしれない。しかし、実際には彼女たちのものではなく、彼女のカレンシのものなのである。「人は女に生まれぬ。女になるのだ」男性社会の現代では、ごく当りまえのことかもしれないが、「少女雑誌」は存在していなかった。ここでも男に都合のよい女が生産されていたのである。まさに「有害図書」である。

最近雑誌事情

しかし、いくら「有害図書」でもオカミの手で潰されるのは腹が立つ。いや、正直言って恐ろしい。ある日、ある雑誌が突然に指名される。理由は、社会に悪影響あり。これだけで十分である。さすがに言論の自由と言う響があるから正面からは手が出せない。しかし、からめ手から攻められるとどうなることやら。「販売の規制」とは、のど元に短刀を突きつけられたも同然である。国が性の問題を取り上げる時は、なにか不吉な予感がする。(H・K)

ケネディの後ろ姿

発車のベルが鳴っていた。電車に飛び乗った途端、ドアが閉まった。息を切らせながらふと見上げたところに、ジョン・F・ケネディの静かに考える横顔のポスターがあった。「人類に、愛と、勇気と、サクセス。」という言葉が書かれていた。彼の横顔に、しばらく私の目はくぎづけにされた。ある懐かしさが込み上げてきたと同時に、「ああ、彼はもういないのだ。」という大きな落胆があった。

そのポスターは、コンピュータ会社の宣伝用のものだった。なかなか好評で、このポスターを欲しいという人が多くて、在庫切れになった程らしい。それは死後二十年を過ぎた今でも、ケネディの人氣がいかに根強いかということ物語っている。

一九六八年六月、ロバート・ケネディが暗殺された時、永遠に失われた。それは、現在までの十六年間の歴史が証明している。

ジョン・F・ケネディが生きた四十六年間のアメリカは、どのような時代だったのか。ヘミングウェイやフィッツジェラルドの「ロストジェネレーション」の時代。ジャズエイジの頃。第二次大戦。そして、アメリカが最も活気に満ち溢れ、輝いていたあの一九五〇年代。その頃日本は昭和三十年代。石原慎太郎の小説「太陽の季節」、「狂った果実」が映画化されたことによって出現した「太陽族」。戦後の新しい世代の文化が始まった。日本もいちばん輝いていた時代であった。

ケネディは、輝けるアメリカの夢であり、象徴であった。そして、今でもそれは変わらない。電車の中のポスター、ジョン・F・ケネディの静かに考える横顔を見たときに、私の心に込み上げてきたある懐かしさと落胆は、アメリカの一九五〇年代と日本の昭和三十年代を懐かしむ気持だ。そしてあの輝いていたその時代が、私たちに再び帰って来はしないという落胆だった。

(T・H)